本六八

文部省著作

高等小學讀本

四

發賣所　株式會社國定教科書共同販賣所

K14
Mo

国立国語研究所
72431
図書館

文部省著作

高等小學讀本

四

文部省
圖書發行許可證

發賣所　株式會社國定教科書共同販賣所

目錄

第一課　大坂の役……一
第二課　日光……五
第三課　害虫……九
第四課　益虫ト保護鳥……十三
第五課　白い雀(一)……十八
第六課　白い雀(二)……二十一
第七課　大岡忠相……二十四
第八課　捕鯨……三十
第九課　遠洋漁業……三十三
第十課　伊能忠敬……三十五
第十一課　阿蘇山……三十九
第十二課　火山……四十四
第十三課　水の變態……四十七
第十四課　蒸氣機關の發明……五十五
第十五課　白虎隊……五十九
第十六課　生蕃……六十二
第十七課　明治三十三年清國事變……六十七
第十八課　高等女學校に入學するについて問合の手紙とその返事……七十二
第十九課　老人と驢馬との話……七十七
第二十課　市町村……八十一

舊恩

大佛

穀物

第一課　大坂の役

關原の戰は、天下わけめの戰なりき。德川家康この戰に勝ちしより、威勢、前日に十倍し、政權、おのづから、その手に移りぬ。されど、天下、豐臣秀吉の舊恩をおもふもの少からず、その子、秀頼、なほ、大坂にあれば、家康、大いに、これをはばかる。

これよりさき、秀吉、京都東山の方廣寺に、大佛を建てたりしが、ある年、地震のために破壞して、いまだ再建せられざりき。家康、秀頼にすゝめて、これを再建せしむ。これ、大坂城には、秀吉のころより、多くの金銀、穀物を貯へた

費用

句

れば、まづ、これをつくさんとするなり。秀頼費用のおびただしきをうれへて、補助をこつども、家康「大佛再建のことは君が家事なり。われ、なんぞあづからん。」といひて許さず。

秀頼、やむをえず、秀吉ののこせる軍用金を費用にあてて、工をおこす。大佛、殿堂、まづ成り、鐘、ついで成りぬ。より て、大供養を行はんとして、家康にはかるに、鐘の銘に「國家安康」の句ありければ、家康「これ、わが名を分ちて、のろはんとするなり。」とて、供養を止めしむ。秀頼のけらい、大いに辯解すれどもきかず。つひに、銘の作者を問ひただ

僧

大名

し、また、人を京都につかはし、五山の僧を集めて、銘の句を判ぜしむ。五山の僧、家康の威勢に恐れて、多く、不吉なりと判じたり。

このとき、秀頼、すでに、二十二歳、そのけらい、みな、主家の再興をのぞみ、家康をにくめるに、いまだかゝるとがめにあひしかば、大いにいきどほり、つひに、意を決して兵をあげたり。されど、これに應じて來れるものは、ただ、諸國の浪士のみにて、大名の來れるものは、一人もあらざりき。家康、ひそかに喜びて、その子、秀忠とともに、諸大名をひきゐて、大坂城を攻む。家康の諸將、必死となりて

和　埋　守

戰へども、城堅固にして、おとすことあたはず。攻守數十日にわたる。家康、すなはち、かへって、和をすゝめ、つひに、城の總堀を埋むることを約するをえて、媾和せり。しかも、外堀を埋めしとき、さらに、内堀をも埋めしむ。秀頼の諸將「總堀とは外堀なり。なんぞ、約にたがへる」となじれども、「もとに復するもよしーいならず、かつ、ふたゝび、兵をあぐる意もなかるべければ」とて、さらにかへりみず。秀頼の諸將、ますますいきどほり、諸國の浪士を集めて、ふたゝび、兵をあげたり。家康、秀忠とともに、これを攻む。攻守、わづかに二日。城づひにおちいり、秀頼母子自殺せ

戰役

自然

尋常

々

り。時は元和元年五月八日のことなり。

この兩度の戰役を、世に、大坂の役といふ。

秀頼、つひに自殺して、天下、さらに、ばばかるべきものなし。家康は、この役の翌年、心安く、静岡にて死せり。

第二課　日光。

わが國に、名勝、はなはだ多けれども、自然の美と、人工の美とをかねたること、日光のごときはあらず。

日光の山は、峯高く、谷深く、樹木、しんしんと生ひしげりて、すがたすでに尋常ならざるに、大谷川の清流、その間を流れ、瀧、所々にかゝり、東照宮、その他の朱殿、玉樓、老樹

紅葉

孫樓

の間に隱見して、景色いはんかたなし。

されば、遊覽の客、年中たゆることなく、夏のさかり、秋の紅葉のころには、來り遊ぶもの、ことに多し。

日光に遊ぶものは、多くは、汽車に乘り、宇都宮市をへて來り、まづ、東照宮を拜し、それより、大谷川にそひて、中禪寺湖に到るをつねとす。

東照宮は徳川家康をまつれる社にして、家康の孫、家光が、天下の富をつくして造りたるものなり。社殿、樓門、廻廊など、いづれも、善をつくし、美をつくせり。そのうち、もっとも名高きは陽明門にして、彩色、彫刻、こと〻ごとく、名工

注

の手に成り、結構裝飾、ともに、精巧をきはめたり。世に、日暮門ともいふは、日暮るゝまで見るともなほあかざればなり。

東照宮の西隣に、二荒山神社あり。その南に、家光の廟あり。華麗なること東照宮にゆづらず。

大谷川は、中禪寺湖より流れ出で、絶壁より直下して、有名なる華嚴瀧となり、さらに、瀨となり、淵となりて、東照宮の社前をすぎ、つひに、鬼怒川に合して、利根川に注ぐ。

中禪寺湖は、東照宮の西、およそ三里、男體山の麓にあり。周回、およそ六里、水すみわたりて、湖面、あたかも、鏡ので

行幸

とく、周圍の山々、影を、さかさまにうつせり。北に、中宮祠あり、東南に、歌濱といふ勝地あり。景色のすぐれたること箱根の蘆湖にもこえたり。天皇陛下、かつて、こゝに行幸したまひて、名を幸湖と下したまへり。

この他、中禪寺湖の北に、湯本温泉あり。東照宮の西に、裏見瀧、東北に、霧降瀧ありて、いづれも、世に聞えたり。

紀州の那智ともろともに、
その名知られし日光の
華嚴瀧は、その高さ
三十餘丈ありといふ。

布　莖

落ち來る水は白布を、
空にかけたるこゝちして、
雷(かみなり)ひびき、雪くだけ、
飛び散る泡(あわ)は谷にみつ。

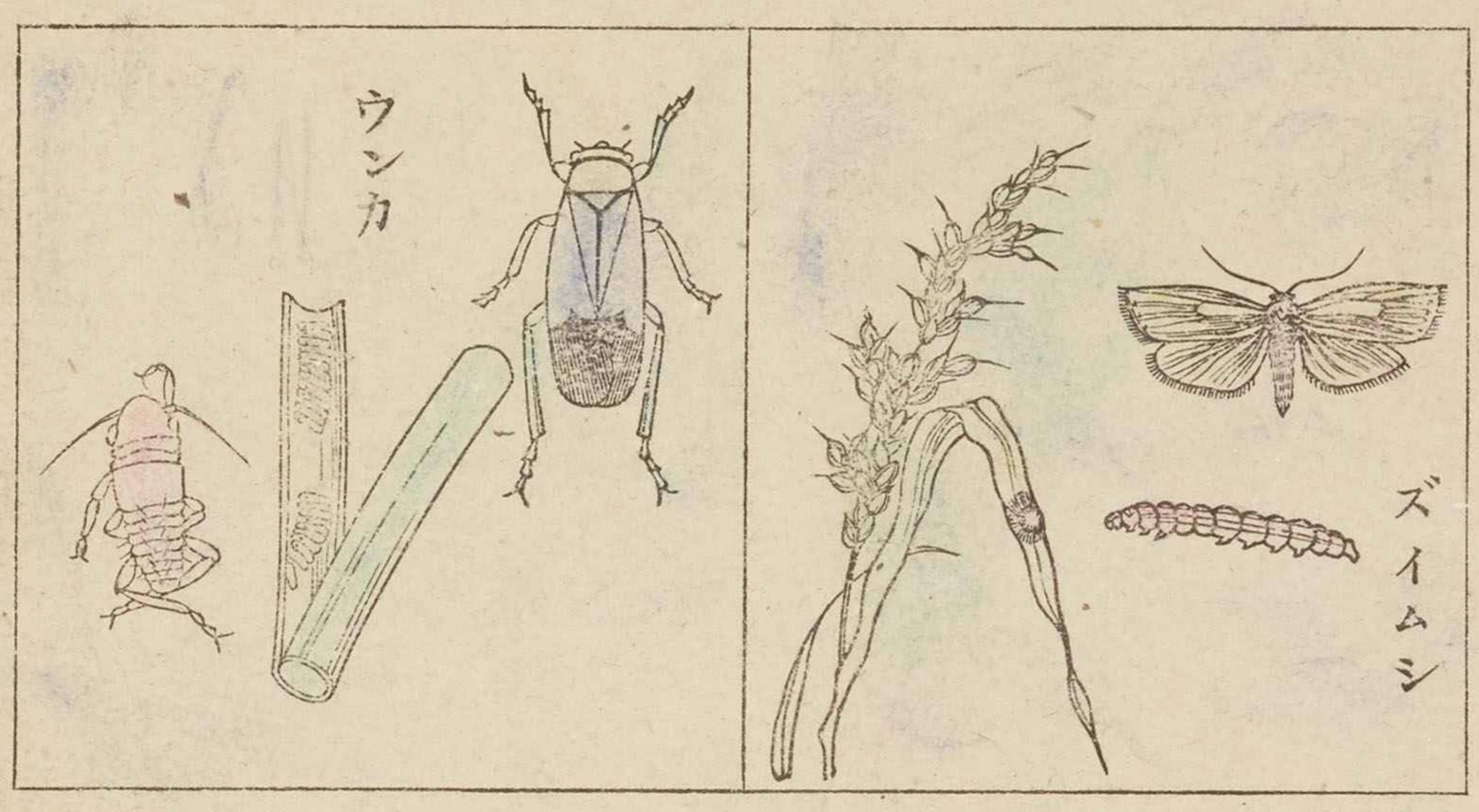
第三課　害虫。

虫類の中には、根、莖、葉、果實などをくひ、あるひは、その養分を吸ひ取って、作物を害するものがある。これを害虫といふ。

害虫の中で、螟虫(ずいむし)、浮塵子(うんか)、夜盜虫(よとーむし)、ありまきなどは作物を害することが、もっともはなはだしい。

回

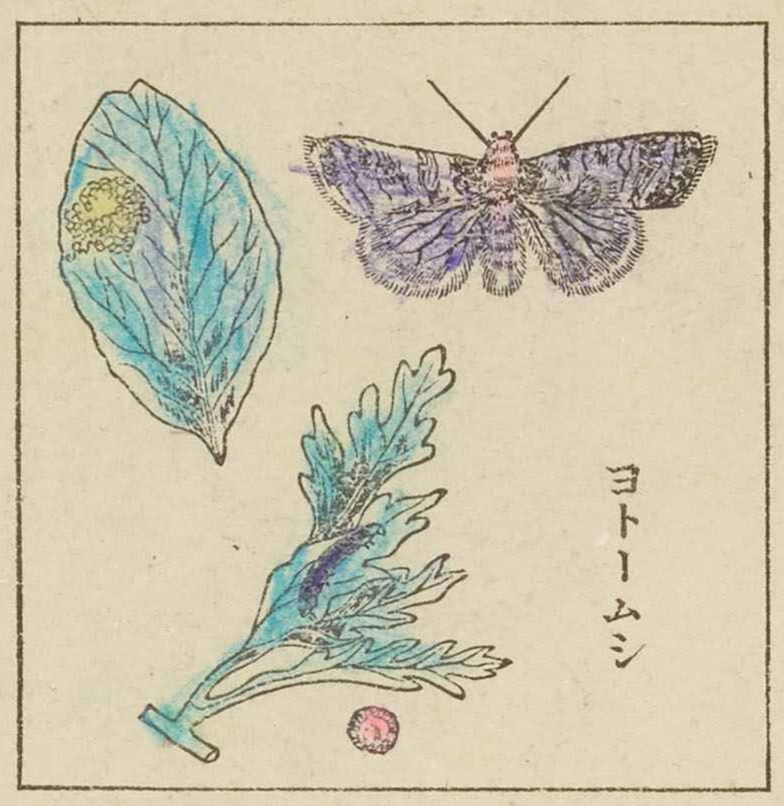
螟虫は稻の害虫である。



稻の苗代にあるころから、穗の出るころまでに、二回、または三回發生し、その莖にくひいって、つひには、これを枯らしてしまふ。

浮塵子も、また、稻の害虫である。稻の成長する間、盛に發生し、葉や莖の汁を吸ひ取って、大いに、稻の發育をさまたげる。大きさは一二分ぐらゐで、それが、たくさん、稻についてゐる有樣は、ちょーど、こぬかをふりかけたよー

であるそれで、こぬか虫ともいふ。浮塵子の害は、ことに恐ろしいもので、明治三十年には、この虫のために、全國の米の取入高が、ざっと五百萬石、へったといふことである。



夜盗虫は畑の作物の害虫である。晝は、作物の根ぎはにかくれてゐて、夜出て、盛に、作物の葉をくふ。春と秋と、二回發生して、春は、豌豆、蚕豆、油菜などを害し、秋は、蕎麥、大根、にんじんなどを害する。もし、ある畑の作物をくひつくすと、さらに、ほかの畑に移り、發生のはなはだしい時には、數十町歩

速

燈火

の作物をも、一夜のうちにくってしまふことがある。ありまきは、野菜（やさい）、そのほか、種々の植物の害虫である。一年に幾回も發生して、その害が、はなはだすくなくない。すべて、これらの害虫は、その害が、このよーに大きく、ひろがることも、はなはだ速（スミヤ）かであるから、つねに注意して驅除（くじょ）しなければならない。驅除する方法は、虫の種類によって一様でない。

蝻虫（ずいむし）は、その蛾（が）となったころ、夜、稻田の近くに、燈火を置いて、これをさそひ殺すがよい。浮塵子（うんか）は稻田の水に、少し、石油を浮せて、ふるひ落して、殺すがよい。また、夜盜虫（よとーむし）は、

加

畑のまはりに、溝をつくり、溝の所々に、穴を掘っておいて、夜、この虫のはひまはって、溝に落ち、穴に集ったのを待って殺し、ありまきは、煙草の煮汁、にがい汁、しゃぼんと石油とをまぜたものをかけて殺すがよい。

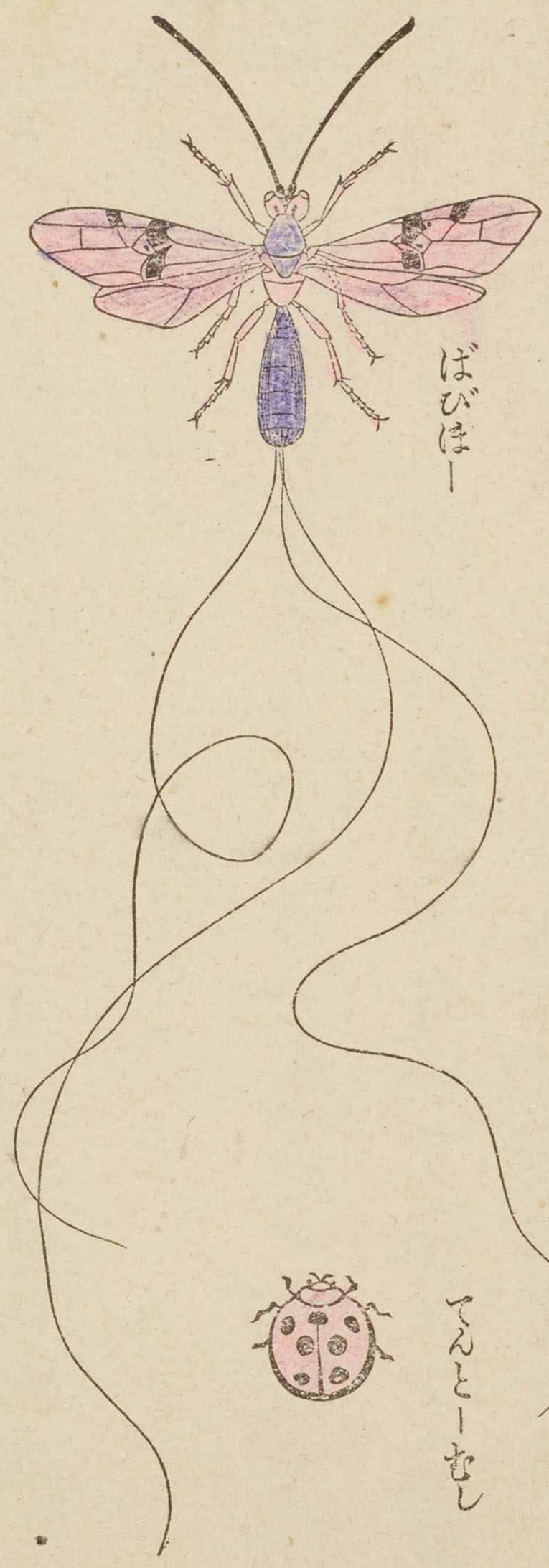
害虫の驅除は、その發生した地方のものが、一致共同して行ふのでなければ、そのかひがない。であるから、政府は、法律で、これを強ひ、從はないものには、相當の罰を加つることにしてゐる。

第四課　益虫ト保護鳥

虫類ノ中ニ、大イニ、作物ヲ害スルモノアルコト、前課ニ

ノベタルガゴトクナレドモ、マタ、害虫ヲ捕ヘ食ヒテ、ワレラヲ益スルモノアリ。コレヲ益虫トイフ。

蜘蛛(クモ)ノ、網(アミ)ヲハリテ、種々ノ害虫ヲ捕ヘ食フコトハ、人ノ、ヨク知レルトコロナルガ、ソノ他、トンボ、カマキリ、テントー虫ナドモ害虫ヲ捕ヘ食フモノナリ。馬尾蜂(バビホー)ノゴト



鳥

減少

貴重

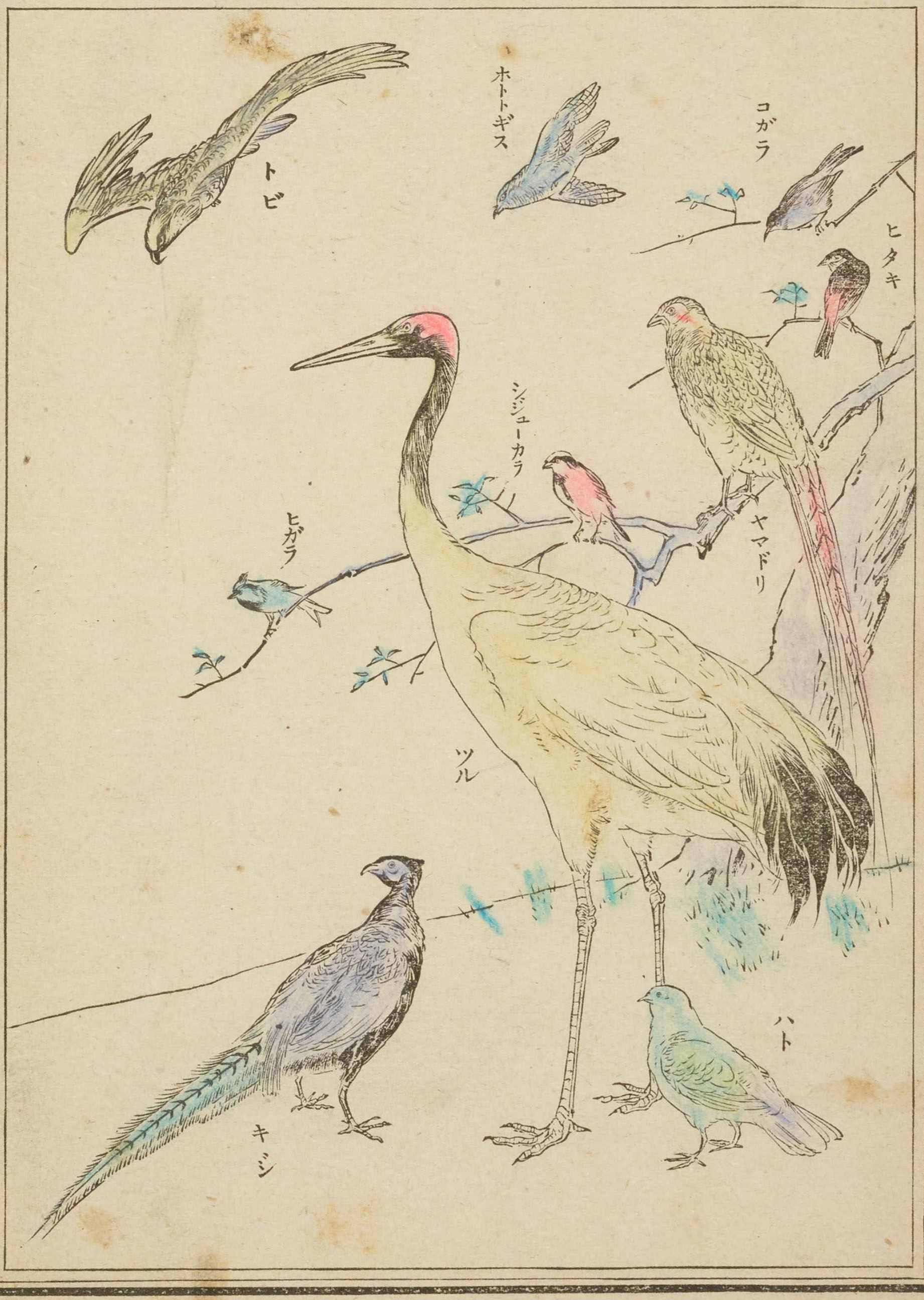
キハ、卵ヲ害虫ノ體内ニ産ミツケテ、コレヲ殺ス。

鳥類ノ中ニハ、害虫ヲ捕ヘ食フモノ、コトニ多シ。燕(ツバメ)、ヒバリ、ホトトギス、コガラ、ヒガラ、シジューカラ、ヒタキナド、コレナリ。コレラノ鳥ハ、スベテ、法律ニヨリテ保護セラルルガユエニ、コレヲ保護鳥トイフ。

鶴(ツル)、キジ、ヤマドリナドモ、マタ、保護鳥ナリ。サレド、コレラハ、ベツニ、害虫ヲ捕ヘ食フモノニアラズ、カヘッテ、作物ヲ害スルモノナレドモ、鶴ハ、名鳥ナルト、ソノ種族ノ、シダイニ減少スル傾アルトニヨリテ、ツネニ、捕フルコトヲ禁止(キンシ)シ、キジ、ヤマドリハ、肉ウマクシテ、獵鳥(リョーチョー)トシテ、貴重

ナルモノナルト、遠ク、外國ニ度リテ、蕃殖(ハンショク)スルコトナキ

高讀四



禁止

始

ナルモノナルト、遠ク、外國ニ渡リテ、蕃殖スルコトナキガタメニ、コレヲ保護セザレバ、タチマチ捕ヘツクサルルオソレアルトニヨリテ、蕃殖期ノ間、捕フルコトヲ禁止セリ。

保護鳥ノ中ニハ、鶴ノゴトク、ツネニ保護セラルヽモノト、キジ、ヤマドリノゴトク、蕃殖期ノ間保護セラルヽモノトアリ。ツネニ保護セラルヽモノニハ、鶴ノホカニ、鳶、燕、ホトヽギス、コガラ、ヒガラ、ソノ他、多クノ鳥アリ。蕃殖期ノ間保護セラルヽモノニハ、キジ、ヤマドリノホカニ、鳩、ヒバリ、ソノ他、多クノ鳥アリ。蕃殖期ハ、三月ノ始ヨリ、

終

十月ノ終マデナリ。

ワレラ、モシ、ツネニ保護セラル、鳥類ヲ捕ヘ、蕃殖期ノ間保護セラル、鳥類ヲ、ソノ間ニ捕フルガゴトキコトアルトキハ、タチマチ、罰ヲ受クベシ。注意セザルベカラズ。益虫ハ、法律ニヨリテ、保護セラル、コトナケレドモ、マタ、ミダリニ捕フルガゴトキコトアルベカラズ。

第五課　白い雀。(一)

昔、西洋のあるところに、一人の農夫があった。はじめは、數十頭の牛、數十町の畑をもってをって、安樂に、その日を送ってをったが、牛は、だん〳〵とたふれていき、畑の收穫は、年々

頭〳〵

とへってきて、今は、たいそう、身代をへらしてしまった。親類

をたが、牛はだん〳〵とたふれていき畑の收穫は年々

とへってきて、今は、たいそー、身代をへらしてしまった。親類のものや、友だちなどは、「どうかしてやりたいものだ。」と思って、助けもし、忠告もしたが、やっぱりへらすいっぽーなので、「あんなふーでは、とてもみこみがない。」といって、みんなみかぎってしまった。しかし、たった一人の友だちだけは「人のよい男だに、何も、さうみかぎらんでも。」といってをった。

ある日、この友だちは、この農夫と、野原の草の上にすわっていろ〳〵と、世間話をしたついでに、そこらを飛んでをる雀(すずめ)の、いかにも早く蕃殖(はんしょく)することや、たいそー狡猾(こーかつ)で、ひどく、作物を荒すことなどについて話した。農夫は

「さては、近年、麥の收穫の少いのはこの雀のせいではあるまいか。」と思った。

友だちは、ふと思ひ出したよーな調子でたづねた。

「それはさうと、君は白い雀を見たことがあるか。」

農夫は不思議さうな顔つきでいった。

「いや。見たことがない。そこらを飛んでをる雀は、みな、茶褐色だが、じっさい、白いのも居るのか。」

友だちは、これに答へていった。

「居るといふことだ。しかし、白い雀は、毎年一羽づつしか、この世に出んといふことだ。そして、その出たもの

も、ほかの雀に見つけられると、ひどくいぢめられる

か、この世に出んといふことだ。そしてその出たもの

影

も、ほかの雀に見つけられると、ひどくいぢめられるので、毎朝、たいそー早く、巣を出て、餌をさがしてすぐ歸ってしまふといふことだ。」

農夫は、この答を聞いて、「いかにもめづらしいことだ。」と思って、「どうかして、その雀を、見つけてつかまへよう。」と決心した。

第六課　白い雀（二）

次の朝、農夫は、たいそー早く起きて、「もしや、白い雀が出てはをらんか。」と、やしきのまはりを見まはり、やがて、野原の方へ出て、所々方々をたづねたが、その影も見えな

俵

んだ。がっかりして、家の方へひきかへして見ると、日は、もう、高くあがってをるのに、じぶんの家には、戸が、まだしまってをって、誰一人起きてをるものがない。牛は、まぐさをほしがってないてをる。農夫は、だいそーいまゝしいことに思った。

そのうちに、下男が麥俵をかついで、裏門から出て來た。

「水車屋へ行くのだらう。」と思って、あとをつけて行くと、そこへは行かずに、居酒屋の方へ行く。居酒屋からは、この下男が酒代を借りてをるのである。おどろいて、すぐ追っついて、その麥俵をとりもどした。

ついて、その麥俵をとりもどした。

牛乳損

農夫が、麥俵をとりもどして歸って來ると、下女が牛乳桶（ぎゅーにゅーをけ）をさげて、牛小屋から出て來た。「どうするのだらう。」と思って見てをると、隣（となり）の家の方へ行く。隣の家へは、この下女が、牛乳を、毎朝賣ってをったのである。ます〳〵おどろいて、すぐ、その牛乳桶をとりもどした。

農夫は、家の中にかけこんで、まだ寢（ね）てをる妻を起して、「朝寢ほど損なものはない。朝寢をしてをる間に、身代がへっていくのだ。」といって、今あったことを話して聞かせた。

農夫は、その後は、毎朝、早く起きて、下男や下女は、早くから、畑へ出して働かせ、じぶんは「白い雀（すずめ）を見つけよう。」と

握

思って、だづねまはった。

一週間ほどたづねまはったが、白い雀は、つひに見つからなんだ。それで、もう、そのことは思ひきって、ただ、身代を恢復することばかりにつとめるよーになった。そのかひは、だん〳〵見えてきた。

それから、二三箇月ほどたって、さきの友だちが來て「どうだ。白い雀は見つかったか」と、笑ひながらたづねた。「おかげで、ぼくも目がさめた。君の恩は、一生忘れん」といって、農夫は、かたく、友だちの手を握りしめた。

第七課　大岡忠相。

大岡忠相は、今から三百三十年ほど前に、江戸に生れた

公平罪裁判

大岡忠相は、今から二百三十年ほど前に、江戸に生れた人であります。一時、山田奉行となって、伊勢の國の山田に居りましたが、徳川吉宗が、紀伊の國から出て、將軍職をつぎました時、ひきあげられて、江戸の町奉行に轉じました。裁判が上手で、公平で、一人も、無實の罪を受けたものがありませんでしたので、人は、みな、「大岡様は神様のよーな方だ。どんなわる者でも、お目をくらますことはできん。」といってをったさうであります。

忠相の裁判について、世に、「大岡さばき。」といって、いろくな話が傳はってをります。次にのべるのも、その一つであ

幸

奉公

世話

ります。

あるとき、江戸に、一人の女がありました。夫に死に別れて、たよるところもないので、人のすゝめるのを幸、あるお屋敷に奉公することにいたしました。しかし、生れたばかりの乳呑子があって、奉公の身では、そだてることもむづかしいといふので、近在の、乳呑子をなくしたばかりの女のところに、里子にやって、そだてゝもらふことにいたしました。

さて、この女は、十年あまりもつとめて歸りました。もとより、わが手で、わが子を世話したい心から、これまでた

訴

びたび、おひまを願ったのでありますが、いつも「いましばらく。」といはれて、とーく、十年にもなったのであります。そこで、さっそく、里親から、わが子をひきとらうといたしましたが、里親は、その子のりこーなのをみこんで「末々は、この子にかゝらう。」と思ってをったのでありますから、とやかういって、かへさうともいたしません。

しかたがありませんから、奉行所に訴へて出ました。そこで、忠相は、二人を、子どもとともに、白洲に呼び出して、調にかゝりました。里親は「この子は私の實の子でございます。」と申し立てます。實の親は「いえ。私の實の子でご

同様

ざいます。この人のところに、里子にやっておいたのでございます」と申し立てます。「二人の子どもに、二人の母親はないはず」といって、いろ〳〵と調べますけれども、やっぱり、同様に申し立てますので、さすがの忠相もさばきかねてをりました。

しばらくして、忠相は、二人に向って、「どちらにも、證據とてはなし、この大岡もさばきかねた。しかたがない。その子を、中に置いて、手を取って引きあへ。勝った方に、その子をとらせよう」と申しわたしました。畏りました」と、雙方からひっぱりあひましたが、中の子どもが、痛さにたへかねて、

偽

「わっ。」と泣き出しましたので、實の親は、はっとおどろいて、手を放しました。里親は、「それみよ。」といって立ちあがらうとします。忠相は、つと立って、「これ。待て。女。」と聲をかけ、「その方こそ偽者だ。あの女は實の母だから、子どもの泣き聲に、思はず、手を放したのだ。その方は、もとが他人だから、子どもの泣くのもかまはずひっぱったのだ。不届者め。」とし、かりつけました。里親は、とーく恐れ入ったといふ話でありました。

この話は、事實あったことか、どうかはわかりませんが、かういふ話の傳はるといふのも、もとは、忠相が裁判が上

手であったことからおこったのであります。忠相は、その後、寺社奉行に轉じ、大名に取り立てられ、七十五の年になくなりました。

第八課　捕鯨。

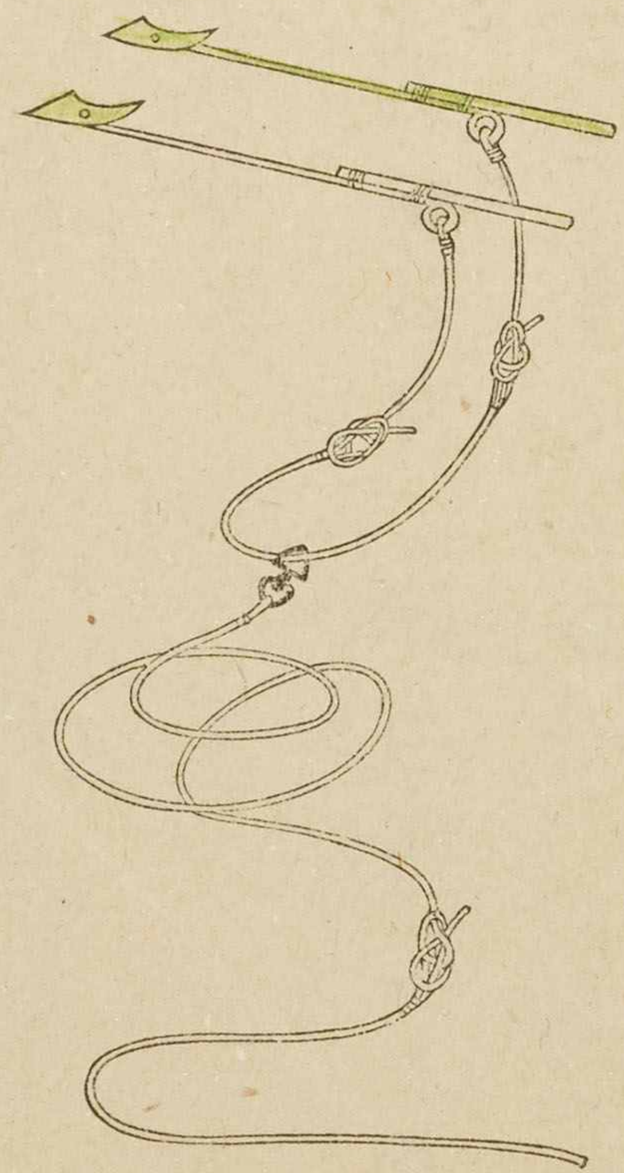
東の空、ほのぼのと白みゆく頃、艪の音勇ましく、沖へ向ふ數十艘の小舟あり。舟ごとに、一本の旗を立てたり。八挺の艪にて、漕ぎ、一人、艫に立ちて、舟を指揮す。進むこと、矢よりも早し。

と見れば、遠く、沖の方に、一匹の大鯨、なかば、脊をあらはして、盛に、水氣をふきと出せり。舟は、別れて、遠方よりこれ

頃　漕　匹

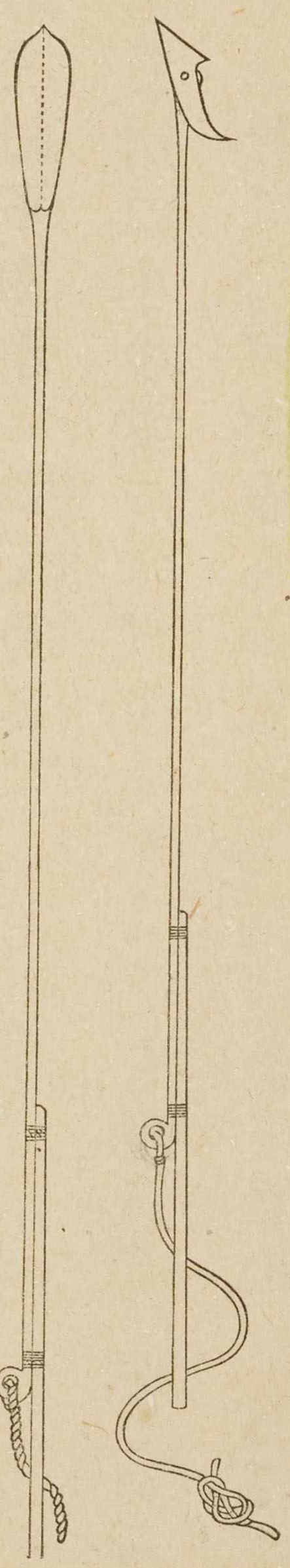
遲　動揺

を圍む。ときに、一艘（そう）の舟、まづ鯨に近づきて、銛（もり）をうつ。うてば、ただちに、旗をふりて合圖（あいず）す。銛には、かねて、長き綱（つな）をつなぎて、鯨の引くにまかす。他の舟は、この合圖を見て、八方よりまた、銛をうつ。鯨は、たへかねて、あるひは、沈み、あるひは、浮びつゝあれまはる。海水、いたく動揺して、舟は木の葉のただよふがごとし。漁夫ら、ときの聲をあげて、これを追ふ。血流れて、海まったく眞紅（しんく）となる。しばらくして、鯨は、勢衰へて、泳ぐこと遲し。舟は、鯨を圍み



貫

て、その行く方に從ひ、海面に浮び出づるごとに、劒(けん)をうつ。今は、鯨も、力つきて動かずなりぬ。



この時、一人の漁夫は、海中に飛び入りて、鯨(くぢら)の脊(せ)に上り、脊をうがちて、太き綱(つな)を結びつく。また、他の一人は、その綱の端(はし)を持ちて、海中に飛び入り、鯨の腹(はら)の下をくぐりて、海面に浮び出で、脊に結びたる綱と結び合せて、鯨をしばる。かくて、舟二艘(そーし)に、横木を貫き、その綱の端を結び

映

富國

波路

つけ、舟歌勇ましく、艪拍子そろへて、引きて歸る。

をりから、夕日、あかくと、海に映じて、その美しさ、勇ましさいはんかたなし。

第九課　遠洋漁業。

日本男子と生れては、

富國の道をはかるべし。

海に、無盡の富ありて、

波路に、行かれぬ所なし。」

怒れる波は高くとも、

吹きまく風はあらくとも、

勝

北に、南に漕ぎ出でて、
すなどるわざも國のため。」
危き道をおかさずば、
勝れし功は立てられじ。
島かげ見えぬ所まで、
漕げや、家なるわが舟を。」
種々の寶は海にあり。
取れど、拾へどつきもせじ。
思へや、獲物うち積みて、
歸る波路の愉快さを。」

器械　氏　勤儉

第十課　伊能忠敬。

學術、いまだ開けず、器械、なほ備はらざるときにあたり、わが國の驛路、海岸を測量して、精密なる地圖を製し、時の人、後の學者に、利便を與へたるものは伊能忠敬なり。

忠敬は、上總の國の人、神保なにがしの第三子なり。十八歳のとき、下總の國香取郡佐原村の豪家、伊能氏の養子となれり。伊能氏は、世々、酒と醬油との釀造を業としたりしが、忠敬の養父、はやく死して、家産、大いに衰へしかば、忠敬、率先して、勤儉を行ひ、つひに、ふたゝびゆたかならしむることをえたり。

訪問

測量

忠敬は、はやくより、暦學を好み、もっぱら、これに、力をつくさんとして、はたさざること久しかりしが、五十歳のとき、家事をその子にゆだね、江戸に出でて、あまねく、暦學者を訪問せり。されど、當時、世に傳ふる暦法、ばなはだくはしからずして、疑はしきことのみ多かりしが、高橋東岡の門人となりて、西洋の暦法を聞くにおよび、大いにさとるところあり、勉學すること數年にして、その奥儀をきはめ、ことに、測量の術は、門人中、忠敬におよぶものなきにいたれり。

忠敬、五十六歳のとき、徳川幕府の命を受けて、奥羽、北海

得

道地方を測量し、その後、また、しばゝ、他の地方の海岸、島嶼などを測量せり。かくて、毎回製したる地圖を集め、一大地圖を製して、これを幕府に奉りたり。これ、われらが信用すべき地圖を得たる始なり。

忠敬の測量を始めしより、こゝにいたるまで、およそ十八年。その間の勤勞は、じつに、たとふるにものなかりき。その奥羽、北海道地方に到りしときには、徒歩して、歩數を數へ、これによりて、原野の里數を計算し、また、海岸を測量せしときには、小舟に乘り、風波をおかし、海岸の出入にしたがひて、縄を引き、これによりて、その里數を計

算せり。また、夜は、星の位置を觀察し、これによりて、各地の正しき位置を定めたり。

忠敬の地圖の、きはめて精密なることは、次の一話にても知るべし。徳川幕府の末、いぎりす人、わが國に來りて、近海を測量せんことをてひしことあり。その時、幕府これに忠敬の製したる地圖を與へしかば、いぎりす人は、これによりて、測量をこゝろみしに、その里數、位置など、少しもたがはざりき。すなはち、ただちに、測量を中止し、わが國の、すでに、かゝる精密なる地圖を有せることを驚嘆せりといふ。

雨

忠敬、人となり、正直にして、外見を飾らず、氣力盛にして、かつて、困難に屈せしことなし。年七十をこえ、髮、ことごとく白くなるにいたりても、なほ、壯年の人のごとく、險をこえ、波をしのぎ、風雨寒暑をおかして、四方に奔走すること數千里、つひに、かゝる大業を成すことを得たり。七十七歳のとき、江戸にて死せり。

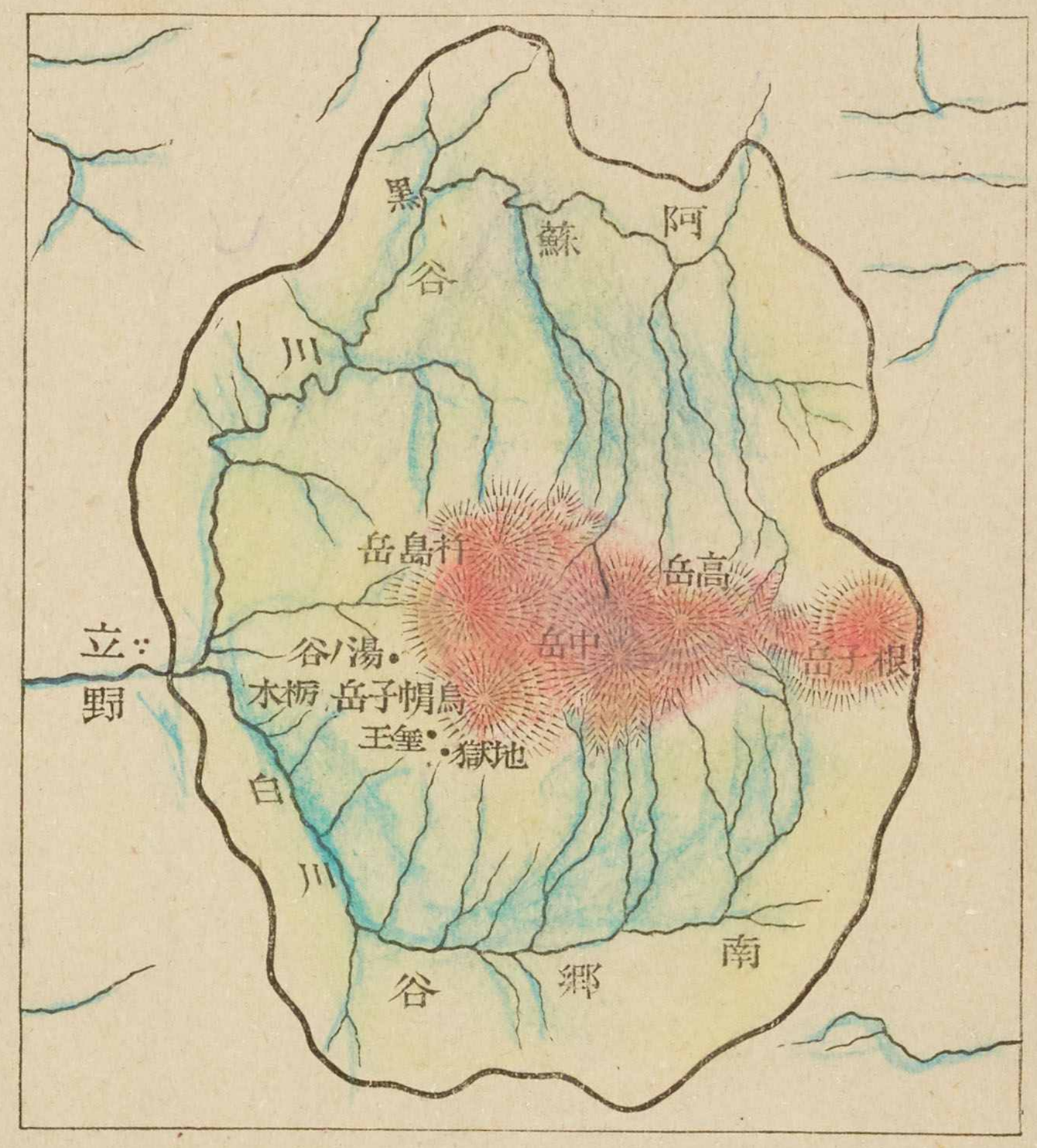
明治十六年、その功を追賞して、とくに、正四位を贈られたり。また明治二十二年には、有志のもの、あひはかりて、東京芝公園に、その測地遺功表を建てたり。

第十一課　阿蘇山

連山

面積

阿蘇山ハ、肥後ノ國ノ東部ニアル火山ノ總稱デ、熊本市ヲサルコト八里餘ノ所ニアル。杵島岳、烏帽子岳、中岳、高岳、根子岳ナドガ、中ニソビエ、連山ガソノマハリヲトリマイテ、チョード、土手ヲ築イタヨーニナッテヰル。コノ連山ハ、スナハチ、舊噴火口ノ周壁デ、舊噴火口ハ、ソノ面積ガ、オヨソ



七十五平方里アル。コンナ、大キナ噴火口ハ、ワガ國ニハ、

噴火口

七十五平方里アル。コンナ、大キナ噴火口ハ、ワガ國ニハ、モトヨリ、世界ニモ、類ガナイトイフコトデアル。

昔、阿蘇山ノ活動ノハナハダシカッタコロニハ、コノ大キナ噴火口カラ、タエズ、熔岩ガホドバシリ出テ、遠ク、東ト西トノ海岸地方マデ、流レテヰタトイフコトデアル。アノ杵島岳、烏帽子岳、中岳、高岳、根子岳ナドハ、ソノ後、コノ舊噴火口ノ内部ニ、サラニデキタ火山デアル。コノ舊噴火口ハ、一時ハ、水ヲタヘテ、湖トナッテヰタコトモアルガ、ソノ周壁ノ西部ガ切レタタメニ、水ガ、トヽ流レテシマッテ、マッタク、底ガカワクヨーニナッタ。今ハ、北ニ、阿

營　噴　昇

蘇谷、南ニ、南郷谷トイフ所ガアッテ、ソコニ、數千ノ人ガ、心安ク、業ヲ營ンデヰルガ、サリトハ、ハナハダシイ變遷デハナイカ。

舊噴火口ノ中ニアル火山ノウチデ、モットモオソクデキタノハ中岳デアル。今、ナホ噴キ出シテヰルノモ中岳バカリデアル。天氣ノヨイ日、コヽニノボッテ、噴火口ノフチカラノゾイテ見ルト、ゴロ〳〵ト、カミナリノヨーナ音ガシテ、水蒸氣ナドガ、灰色ノ綿ノヨーニ、ドン〳〵トタチ昇リ、コノヘンデ、「ヨナ。」トイフ、岩ノ碎ケタ灰ガ、パラパラト降ッテクル。噴キ出ス勢ノ烈シイ時ニハ、熔岩ノカタ

マリヲ噴キ出スコトモアルガ、ソノ昇ルモノト、落チル

登山

マリヲ噴キ出スコトモアルガ、ソノ昇ルモノト、落チルモノトガ、タガヒニ入リマジッテヰル様子ハ、何トモイヒヨーノナイホドスサマジイ。夜、コレヲ見ルト、マルデ、火ノ柱ノヨーニ見エル。コノ山ハ、マタ、見ハラシガヨイノデ、登山スルモノガスクナクナイ。

舊噴火口ノ中ニハ、白川、黑川トイフ二ツノ川ガアル。白川ハ、南郷(ナンゴー)谷ヲ流レ、黑川ハ阿蘇(アソ)谷ヲ流レ、立野トイフ所デ、イッショニナッテ周壁(シューヘキ)ノ切目カラ、西ノ方ヘ向ッテ流レテヰル。昔、湖ノ水ノヒイタ道筋(ミチスヂ)デアルトイフコトデアル。マタ、多クノ温泉ガアル。ソノウチデ、垂玉(タレタマ)、地獄(ジゴク)、栃木(トチノキ)、湯谷ナ

詩

ドガ、モットモ名高イ。

第十二課　火山。

地殼に、裂目ができると、そこから、水蒸氣や、岩のかけや、熔岩などが噴出することがある。火山といふのは、この噴出したものが、うづだかく積ったものゝことである。この噴出したものゝ積るのは、噴火口の周圍が、いちばん多く、そこからとほざかるにつれて、しだいに、少くなるものである。それで、火山は、ふつう、圓錐形になってゐる。富士山はそのよい例である。古人の詩に、「白扇、さかさまにかゝる、東海の天。」といふ句があるが、「白扇、さかさまに

かゝる。とあるのは、富士山の圓錐形になってゐることを

形容

か、る。とあるのは、富士山の圓錐形になってゐることを形容したのである。

しかし、火山は、噴出のたび重なることのために、その形のかはることの多いものである。阿蘇山は、さいしょの噴火口のうちに、さらに、多くの火山ができて、つひに、あのよーな、複雑な火山になったのである。

火山のうちには、阿蘇山や浅間山のよーに、いまに、噴出をつづけてゐるものもあり、富士山や箱根山のよーに、いまは、噴出をやめてゐるものもある。しかし、噴出をやめてゐるものでも、いつ、また破裂するかも知れないので

破裂

にか、る東海の天といふ句があるが、白扇さかさまに

膨脹力

暴風

ある。

火山の破裂は、地中にこもってゐる水蒸氣がもとになっておこるものである。いま、もし、地中にこもってゐる水蒸氣が、その膨脹力によって、地殼の弱い所を破って出ると、土地は、たちまち鳴りふるひ、岩の、みじんに碎けたもの、すなはち、火山灰が飛び散って、空は、見るまにまっくらになり、時には、氣象に、激變をおこして、電がひらめき、暴風が吹くこともある。これについては、まっかな熔岩を噴出するのであるが、その熔岩の光が、飛び散る火山灰や、水蒸氣にうつって、空をこがしてゐるさまは、見るもすさまじいばかりである。安永八年の櫻島の破裂はこのいちじるし

うつって、空をこがしてゐるさまは、見るもすさまじいばかりである。安永八年の櫻島の破裂はこのいちじるしい例で、九州、四國はもとより、山陰、山陽、東海道までも、火山灰をふらしたといふことである。

しかし、火山の破裂の有樣は、地中にこもってゐる水蒸氣の多少によって、大いに違ふものである。水蒸氣の量の多いときには、明治二十一年の磐梯山の破裂のよーに、山の幾部を破壞してしまふこともあるが、少いときには、ごくおだやかで、ほとんど、危險のないこともあるものである。

第十三課　水の變態。

現象

鐵瓶の水がわきたつときには、その口から、すこしはなれた所に、白い湯氣が立つ。この湯氣の立つ所に、つめたい茶碗を持って行くと、見てゐるうちに、しづくがたれるようになる。かういふ現象は、ひとり、鐵瓶の水ばかりでなく、地球上の、どこにある水にもおこるものである。

地球上の水は、太陽などの熱にあたゝめられると、目に見えない氣體となって、空氣中に昇る。これを水蒸氣といふ。あの鐵瓶の口と、湯氣との間の、何も見えない所は、すなはち、水蒸氣が昇ってゐるのである。水蒸氣は、冷えるとこりちぢまって、ごくこまかい水球となる。この、水球の、地

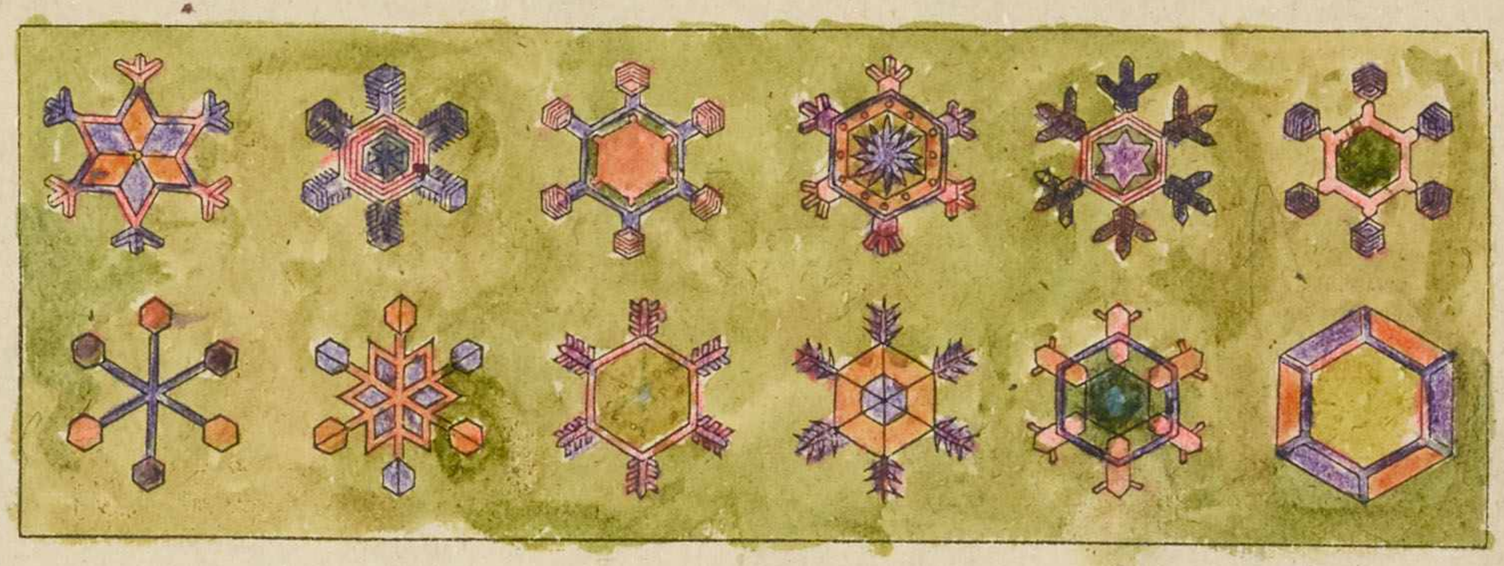
こりちぢまってごくこまかい水球となる。この、水球の、地

性質

面に近い所で、たくさん集って、空中に浮んでゐるものを霧（きり）といひ、高い所で、空中に浮んでゐるものを雲といふ。あの、鐵瓶の口から、すこしはなれた所に立つ湯氣はずなはち、この霧、雲と同じ性質のものである。

雲は、水球（みづたま）の、高い所で、たくさん集って、空中に浮んでゐるものであるが、この水球は、だがひにくっついて、大きい水球になると、もう、空中に浮んでゐることができないで、地面に落ちてくる。これを雨といふ。あの、つめたい茶碗（ちやわん）からたれるしづくは、この雨と同じしだいでできたのである。

變化



また、水蒸氣が、高い所で、ひどく冷えると、六出の、白い細片となり、または、圓い、白いかたまりとなって降ってくる。この、六出の、白い細片となったものを雪といひ、圓い、白いかたまりとなったものを霰（あられ）といふ。みぞれは、雪や霰の降ってくる途中、すこしとけたものである。

雪や霰（あられ）は、水蒸氣の、高い所で變化（かはる）したものであるが、水蒸氣の、まだ、地面、または、地面に近い所にあるうちに、夜、地上の石、または、草木の葉

面に近い所にあるうちに夜地上の石または草木の葉

露　霜

氷點　透明

などにふれて、冷えてこりちぢまると、大きい水球（みづたま）となる。これを露といふ。また、いっそう冷えてこほると、雪のようなものとなる。これを霜といふ。露と霜とはその成立は同じであるが、温度の、やゝひくいか、ひどくひくいかによって、かよーに、形が違ふよーになるのである。

また、水は水蒸氣になったり、水蒸氣になったあとで、いろいろと、形をかへたりするばかりではなく、そのまゝでも、氷點以下の温度にあふと、こりかたまって、透明（すきとほり）な固體となる。これを氷といふ。水が氷となるときには、いつも、そのかさを増すものである。

述

多量

以上述べたとほりであるから、霧(きり)、雲、雨、雪、みぞれ、霰(あられ)、露、霜、氷などと、その名こそ違ってゐるが、いづれも、水の形をかへたものにすぎないのである。そのうち、雨、雪などは、あるひは、降り、あるひは、降ってとけて、おもに、地中にしみこみ、涌(わ)いて、泉となり、流れて、河水となり、そして、海に入るのであるが、これらの水は、さらに、太陽などの熱を受けて、水蒸氣となって、空中に昇るのであるから、水は、いつも、一種の循環(じゅんかん)運動をしてゐるのである。水が、千百の河から、海に注いでゐても、べつに、あふれるといふこともなく、海の水が、多量(タタレ)の水蒸氣となって、空中に昇ってゐても、べ

つにかれるといふことのないのも、つまり、この循環運(ぐるぐるめぐる)

つに、かれるといふことのないのも、つまり、この循環運動があるからである。

霧。

を山田の霧の中道ふみ分けて、
人來と見しはかゝしなりけり。

雲。

あけわたる、たかねの雲にたなびかれ、
光消えゆく、弓はりの月。

雨。

けふの雨に、はぎも、をばなもうなだれて、

多量
く海の水が多量の水蒸氣となて空中に昇てゆく

うれへがほなる秋の夕暮。

雪。

ふくる夜ののきのしづくのたえゆくは、
雨もや雪に降りかはるらん。

霰。

むら雲のたえまに、星は見えながら、
夜行く袖に散る霰かな。

露。

白玉の、秋の木の葉にやどれりと
見ゆるは露のはかるなりけり。

見ゆるは露のはかるなりけり。

霜。

朝日さすかたへは消えて、のき高き
家(や)げに残る霜の寒けさ。

第十四課　蒸氣機關(きかん)の發明。

今から二百五十年ばかり前に、いぎりすに、うーすとるといふ人があった。ある寒い夜、つくねんと、爐(ろ)のはたにすわって、爐の上にかけてある鐵瓶を見つめてゐると、水蒸氣が、しきりに、その蓋(ふた)をがたつかせる。うーすとるは、これを見て、「もしも、この蓋を、しかとしばり、その口をふさいでしまったら、どんなことがおこるであらう。きっと、鐵瓶

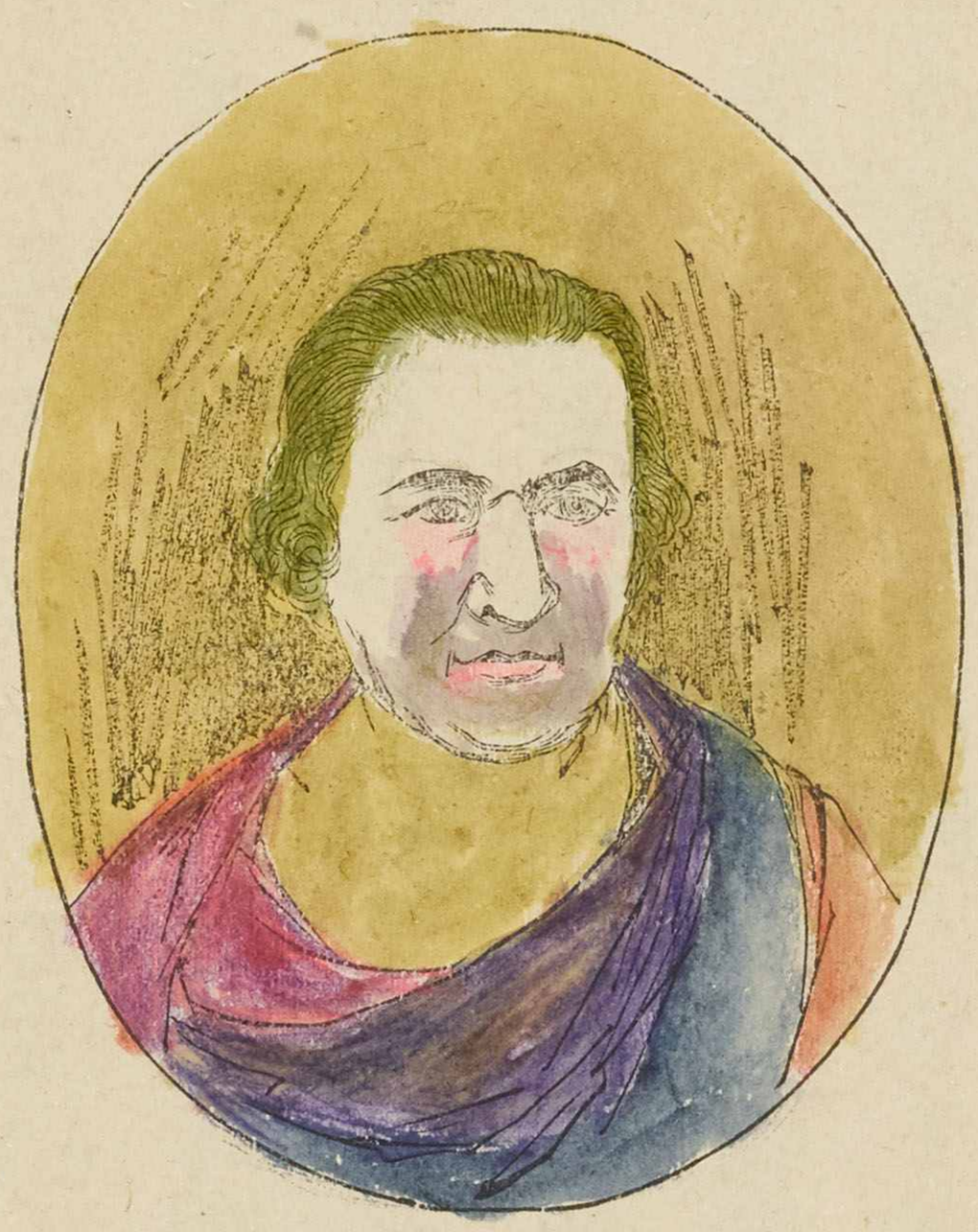
不完全

研究

は、蒸氣力のためにこはれてしまふにちがひない。しかしてみると、『蒸氣力は、よほど強い。』といはねばならん。』と考へた。そして、「この強い蒸氣力を、機械（きかい）に利用したら。」と思って、それから、長い間、いろ〳〵と、工夫をこらして、つひに、蒸氣力を利用して、水を、四十尺の、高い所に上げることのできる機械を發明した。これが蒸氣ぽんぷのできた始である。

しかし、この工夫は、まだ、よほど不完全なものであったが、これがいとぐちとなって、おひ〳〵、蒸氣力の利用について研究するものが出てくるようになり、百年ばかりあ

兩親



とには、じぇーむす、わっととといふ、いぎりすの人が、つひに、完全な蒸氣機關（かん）を造るよーになった。

わっとは、幼いときは、からだが弱くて、學校に通ふことも出きなんだので、うちで、兩親から、讀書、算術、習字などを教へられてゐたが、うまれつきよーで、ものを工夫することがすきであった。

わっとは、十九歳の時、ろんどんに行って、數學用の機械（かい）を造

研究するものが出てくるよーになり百年はかりあ

故郷
教授

ることを習ってゐたが、その翌年、故郷に歸り、その後、すぐーといふ市に出て、機械商店を開いた。ところが、「わっとはなみ〳〵の少年でない。」といふ評判が、たちまち、高くなって、大學の教授や學生が、「新奇な機械について批評しあはう。」と思って、この商店にたづねてくるものが、おほぜいあった。そのうちに、一人の、理科の教授があった。ある時、小さい、蒸氣機關の雛形に、損所のあることを見つけて、その修繕をわっとに頼んできた。

わっとはこの機關の構造を調べてみて、一度は、その巧妙なのに感じたが、なほ、くはしく調べるにつれて、それに、

缺點

應用

大きな缺點のあることを發見した。それで、いろ〳〵と工夫して、これをおぎなひ、さらに、工夫をつづけて、とゝ、完全な蒸氣機關を發明した。

この發明があってから、これを汽車、汽船に應用し、また、種種の工業にも應用するようになって、世人は大きな便利を受けることゝなった。じつに、今日の文明は、わっとのおかげをかうむってゐることが、はなはだ少くないのである。

第十五課　白虎隊（びやつこたい）。

霰（あられ）のごとくみだれくる、
敵の彈丸（だんがん）ひきうけて、

落城

命を塵と戰ひし、
　三十七の勇少年。
これぞ會津の落城に、
　その名聞えし白虎隊。
味方少く、敵多く、
　日は暮れはてゝ、雨暗し。
はやる勇氣はたわまねど、
　疲れし身をばいかにせん。
倒るゝ屍、流るゝ血、
　たのむ矢玉もつきはてぬ。

務

残るは、わづかに十六士、

「たび、あとに立ち歸り、主君の最期にあはばや。」と、飯盛山によぢのぼり、見れば、早くも、城落ちて、焔は天をこがしたり。」

「臣子の務はこれまでぞ。いで。いさぎよく死すべし。」と、枕ならべて、こゝろよく、刃に伏しゝ物語、

傳ヘテ、今ニ、美談トス。

散リたる花のかんばしさ。」

第十六課　生蕃（セイバン）。

臺灣（タイワン）ノ蕃人（バンジン）ノ中ニテ、支那（シナ）ノ風ニ化セラレテ、ヤヽ、開ケタルモノヲ熟蕃（ジュクバン）トイヒ、ナホ、大イニ野蠻（ヤバン）ナルモノヲ生蕃（セイバン）トイフ。

生蕃（セイバン）ハ、多クハ、山地ニ住メドモ、マタ、東部ノ平地ニ住ムモノアリ。山地ニ住ムモノハ、平地ニ住ムモノヨリモ、イッソー野蠻（ヤバン）ナリ。

生蕃（セイバン）ノ中ニハ、所々ニ散在シテ住メルモノアリ、數家集

リテ、部落ヲナセルモノアリ。部落ヲナセルモノ、中ニハ、ソノ周圍ニ、樹林(ジュリン)、竹藪(タケヤブ)ナドヲメグラセルモアリ。

家ハ、オホムネ掘立小屋(ホッタテゴヤ)ニシテ、竹、木ヲ柱トシ、茅(カヤ)、竹ナドニテ、屋根ヲフキ、外部ハ、木、竹、アルヒハ、茅ヲユヒテ造レリ。サレド、北部ニ住メルモノ、中ニハ、山腹(サンプク)ヲケヅリ、家ヲ造リタシテ、ナカバ穴居(ケッキョ)ノ様ヲナセルモアリ。マタ、床ハ、オホムネ土床(ドショー)ナレドモ、石、マタハ、籐席(トーセキ)ナドヲシケルモアリ。

生蕃(セイバン)ノ中ニハ、ベツニ、穀物倉(グラ)ヲ有セルモノアリ。穀物倉ニハ、低キ草屋ニ、床ヲハレルモノ、床ノ下ニ、短キ柱ヲ立

備

テヽ、通氣ニ便セルモノナドアレドモ、ソノ、モットモ發達セルモノハ、床ノ下ニ、長キ柱ヲ立テ、柱ト床トノ接セル所ニ、木製ノツバヲハメテ、鼠ノ害ヲ防グニ備ヘタルモノナリ。次ノ圖ニオイテ見ルガゴトシ。

獸皮

着物ノ類ハ、オホムネ、體ノ上部ヲ掩フノミナリ。形サマザマニシテ、襟ノ開キタル筒袖ノゴトキモノアリ、袖ナクシテ、陣羽織ノゴトキモノアリ、胴ナクシテ、袖バカリノゴトキモノアリ、マタ、方形ニシテ、ケサノゴトキモノアリ。材料ハ、オモニ、布ヲ用ヒ、マタ、獸皮ヲ用フ。布ハ生蕃ガ、カラムシニテ、織レルモノ、マタハ、支那人ヨリ得タル

モノナリ。ミヅカラ織レルモノヽ、中ニハ、色糸ニテ、種々ノ織模(モヨー)様、マタハ、縫模様ヲナセルモアリ。

生蕃(セイバン)ハ、身體ノ飾(カザリ)トシテ、植物ノ種子、動物ノ牙、マタハ、種々ノ玉ヲツヅリテ、首(クビ)ヨリ胸(ムネ)ニタレ、地方ニヨリテハ、耳タブニ、アナヲアケテ、種々ノ飾アル、竹ノクダヲ貫ク。マタ、北部ニ住メルモノヽ、中ニハ、男子

齒　粟　骨

ハ、額(ヒタヒ)ト顎(アゴ)トニ入墨(イレズミ)シ、女子ハ、額ノホカ、頬(ホホ)ヨリ口ノマハリニカケテ入墨シタルモノアリ。マタ、胸(ムネ)、腕(ウデ)ナドニ入墨セルモアリ。コトニ奇(キ)ナルハ前齒ヲ缺(カ)ク風ノアルコトナリ。

生蕃(セイバン)ノ男子ハ、外ニ出デテ、オホムネ、狩獵(シュリョー)ヲ營ミ、女子ハ農業ニ從事シ、マタ、織物ヲ製ス。ミナ、粟、米、サツマイモ、鳥獸ノ肉ヲ食用トシ、食器ニハ、土器、マタハ、籐(トー)、木ナドニテ造レル、盆(ボン)ノゴトキモノヲ用フ。多クハ、指ニテツマミ食ヘドモ、マタ、木製ナドノヘラニテ食フモアリ。

生蕃(セイバン)ニハ、人ノ首(クビ)ヲ切リ、ソノ頭骨ヲ貯ヘテ、勇氣ヲホコ

ル風アリ。北部ニ住メルモノヽ間ニ、コトニ盛ニ行ハル。

昔ヨリノ武器ハ、六尺バカリノ木、マタハ、竹ヲ柄(エ)トシタル槍(ヤリ)ト、長サ二尺アマリノ刀トガオモナルモノナリ。サレド、マタ、弓、矢ヲ有スルモノモ少カラズ。近時ニイタリテハ、鐵砲モ、マタ、大イニ用ヒラル。

臺灣ノ、イマダ、ワガ國ニ屬セザリシ頃、コノ生蕃(セイバン)ノ、ワガ民ノ漂流(ヒョーリュー)セルモノヲ害セシコトアリシカバ、ワガ政府ハ、兵ヲ出シテ、コレヲ懲(コラ)シタリ。コレ明治七年ノコトナリ。

第十七課　明治三十三年清(しん)國事變。

清國

公使館

守備

明治三十三年五月の末、清國の北部に、義和團といふ暴徒おこり、耶蘇教を排斥し、外國人を放逐せんとして、大いに、世をさわがしたり。しかるに、清國政府は、これをしづめんとせざるのみならず、かへって保護するがごとき有様なりしかば、暴徒は、大いに、勢をえて、つひに、北京に入り、各國公使館を圍むにいたれり。

これよりさき、各國公使は事態の容易ならざるを察し、かねて、太沽にまはしたりし軍艦より、水兵を入京せしめて、その公使館を守備せしめしが、その兵少數にして、暴徒の勢に敵すべくもあらざりければ、各國は、さらに、

關係

本國より、兵を送りて、公使以下の居留民を救はんとせり。しかるに、太沽砲臺には、多くの清兵守り居て、その入京をさゝへしかば、各國は義和團に關係ありと認め、擊ちて、これをおとしいれ、さらに、進んで、天津を占領せり。天津は北京街道の要地なるが、この地の居留民は、日々、清兵のために攻擊せられたりしなり。時は、七月十四日。各國の兵は、破竹の勢をもって北京へ向って發しぬ。

さて、北京にある各國公使館にては、暴徒に圍まれしより、共同防禦の方法を講じ、いぎりす公使館を本營として、おの〳〵、防禦につとめたり。わが公使館にては、館員

技師

のほかに、留學生、技師、新聞記者、寫眞師など、三十三人をもって、義勇隊を組織し、さきに入京せしめたる水兵、二十四人とともに、熱心に防禦につとめたり。

されど、にはかのことゝて、兵器など備はらざりしかば、有り合せたる古槍、日本刀、獵銃などをとりて、勇ましくいでたち、あるひは、哨兵となり、あるひは、傳令使となりなどして、晝夜、警戒の役をつとめたり。また、館内の婦女も、あるひは、炊事をつかさどり、あるひは、負傷者を看護し、あるひは、防禦工事に用ふる土嚢を縫ひなどして、かひがひしくたち働きたり。

炊事

かく、必死となりて、防禦につとめたれども、日をふるにしたがひて、死者は生じ、負傷者はふえ、彈藥、糧食は、やうやくつきんとす。人々の心中いかばかりなりしならん。しかるに、七月十八日には「各國の兵、すでに、太沽をおとしいれ、ついで、天津をも占領せり。」との報來り、また、翌月十日には「十三四日頃北京に達すべし。」との報來りしかば、人々は勇氣百倍して、ますます、防禦につとめたり。

八月十三日より、敵の攻擊は、にはかに、烈しくなりぬ。人人は、たゆみなく、防禦に力をつくしたりしが、十四日の午前二時頃はるか東方にあたりて、銃砲の響を聞けり。

「すはや。援軍近づきぬ。」といひあふと同時に、敵の攻撃は、ますます、烈しくなりしが、夜の、いまだまったく明けはなれざる頃、わが日本軍は、城門を打ち破りて、潮のごとく、城内に入りこみ、各國の軍も、つづいて入りこみて、ただちに、公使館との連絡を通じたり。各國公使館の暴徒に圍まれしより、こゝにいたるまで、じつに、六十三日なり。」この事變において、わが軍は、他の外國軍にこえて、つねに、勇敢に戰ひしかば、「日本軍は武勇なり。」との評は、ますます、世界各國にとどろきわたれり。

第十八課　高等女學校に入學するにつ

試驗　課程

いて問合の手紙とその返事。

やうく、暖になりました。おかはりはでございませんか。わたくしは、無事で勉強いたしてをりますから、どうぞ、御安心下さいませ。

さて、わたくしは、この月で、高等小學校第二學年の課程をへるはずでございますから、來月から、御校の本科第一學年に入學いたしたいと思つてをりますが、今年も、入學試驗がございませうか。もし、でざ

技藝專修

いますなら、その用意をいたしておきたいと思ひますが、どんなことを調べておいたらよろしうございませうか。

また、林つゆ子さんも、技藝專修科の第一學年に入學する用意をいたしておきたいといってゐらっしゃいますから、お手數でございませうが、どうぞ、その方のこともおしらせ下さいませ。かしこ。

三月五日

高山しげ子様

吉村はな

志願　去　親　尋

お手紙拜見いたしました。あなたは、このたび、當校の本科に入學御志願とのこと、また、林つゆ子さんは技藝專修科に御志願とのこと。わたくしは、つい去年まで、同じ學校で親んだ友だちが、二人までいらっしゃるかと思ふと、だいそーうれしうございます。

お尋のことは、學校で聞きましたら、まだ、しかとはわかりませんが、たぶん、入學試驗はあるだらうとのことでございました

た。また、試驗は、高等小學校第二學年の程度で行はれ、本科には、國語と算術とがあり、技藝專修科には、このほかに、裁縫があるとのことでございました。

お二人ともぜひごろおできなさるのでございますから、改めて御勉強なさらないでもよいかとぞんじますが、ねんのため、今まで習っていらっしゃったことを、よくおさらひなさいましたら、じゅーぶんだらうかとぞんじます。

いづれ、この月末には歸りますから、くはしいことは、そのをりに申し上げませう。

かしこ。

三月七日　　高山しげ

吉村はなこ子様

第十九課　老人と驢馬との話。

市場

一群

ある時、老人が、驢馬（ろば）を賣らうと思って、むすこといっしょに、町の市場の方へひいて行くと、話しつ笑ひつして來る、一群の女に行きあった。一人の女は、大きな聲で、

「あれ。ごらんなさい。乘れる驢馬に乘りもせず、二人な

證據

がら歩いて來ますよ。まー。をかしな人ではございませんか。」

といった。老人は、これを聞いて、「なるほど、もっともだ。」と思って、むすこを驢馬に乘せて、その側につきそひながら行った。しばらく行くと、なにか、ひそ〳〵話しながら來る、一群の老人に行き逢った。一人の老人は、他のものに向って、

「そら。ごらんなさい。いま、私の言ったことの證據はあれです。今頃の若いものが、なんで、としよりをいたはるものですか。としよりをば歩かせておいて、じぶんは、いかにもらくさうに乘って行くではありませんか。」

逢

といった。老人は、これを聞いて、また、「なるほど、もっともだ。」と思って、むすこを馬からおろして、じぶんが、かはって乗って行った。

また、しばらく行くと、めいめい、子どもをつれて、じきりに話しながら來る、一群の女に行き逢った。一人の女は、老人に向って、

「おぢいさん。あんまりぶしょーではないか。子どもを歩かせておいて、じぶんばかり、らくさうに乗って行くとは。」

といった。老人は、これを聞いて、また、「もっともだ。」と思って、む

虐待

すこを尻馬に乗せて、町近くまで行った。

すると、一人の教師らしい人に行き逢った。その人は、老人に向って、

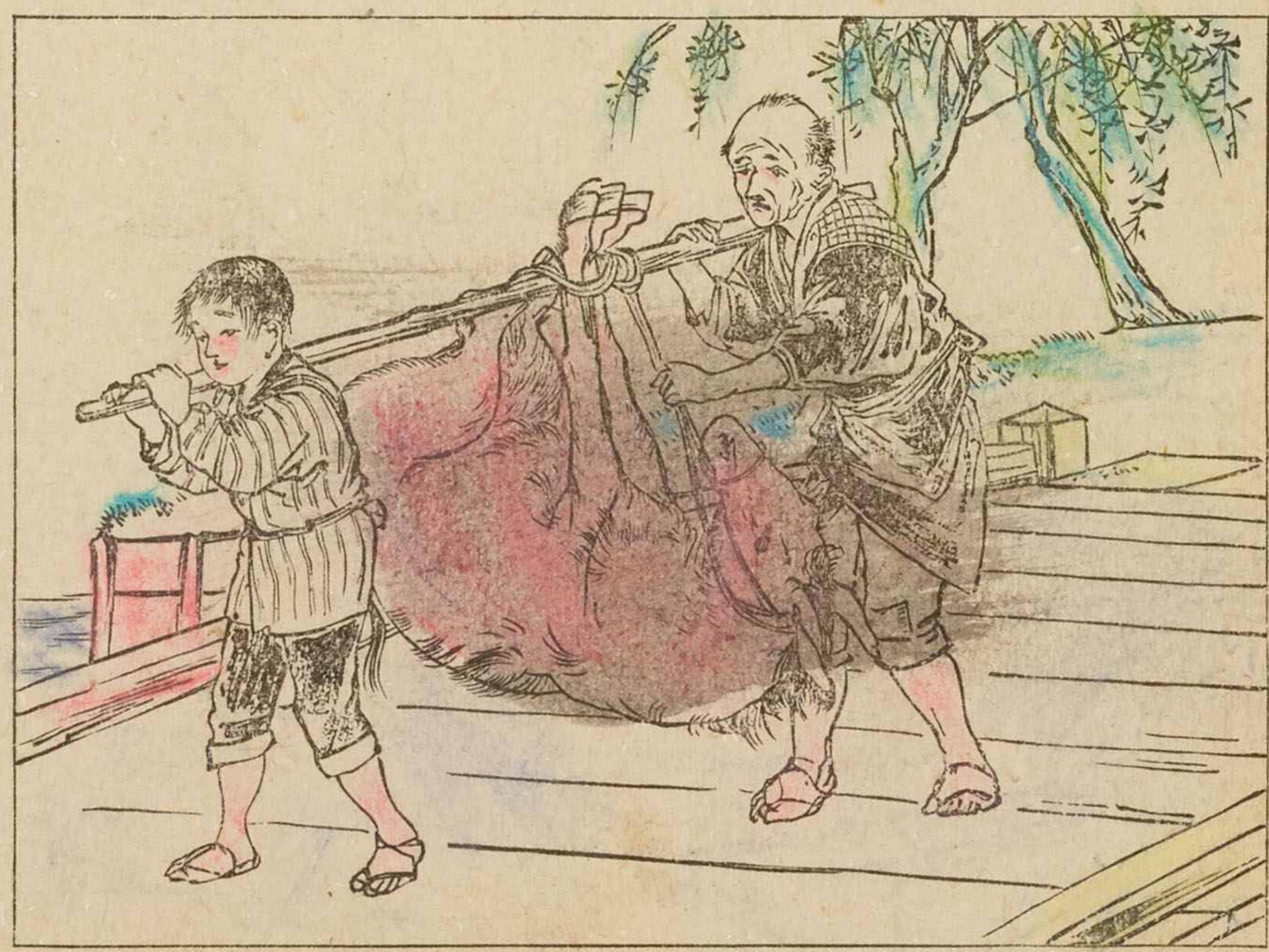
「おぢいさん。一匹の驢馬に、二人乗るとは、あんまりむでい。動物を、そんなに虐待するものではない。」

といった。老人は、これを聞いて、また、「もっともだ。」と思って、むすことといっしょにおりた。しかし、今は、「ひいて行ってもわるいし、乗って行ってもわるい。」と思って、驢馬の足を、縄でしばって、棒をとほして、かついで、町の入口の橋の中ほどまで來た。

橋の上には、人が、おほぜい集ってゐたが、このさまを見て、みんな、一度にはやしたて、笑った。馬は、おどろいてばたくするとそのとたんに、縄(なは)が切れて、川の中に落ちて死んでしまった。老人は、力をおとして、むすこをつれて、すごすごうちへ歸った。

第二十課　市町村。

ワガ國内ノ政務ハ、コトゴトク、政府ニテトレルニハア



委任　財産　權利

ラズ、ソノ一部ハアル團體(ダンタイ)ニ委任シ、コレヲシテ、ミヅカラ行ハシム。コノ團體ヲ自治團體トイフ。

市、町村ハ、イヅレモ、自治團體(ダンタイ)ナリ。オヨソ、市、町村内ニ住居スルモノハ、スベテ、ソノ市、町、村ノ住民ニシテ、住民ハ公共ノ營造物ト、市、町、村ノ有セル財産トヲ共用スル權(ケン)利ヲ有スルトトモニ、市、町、村ノ費用ヲ分擔(ブンタン)スベキ義務ヲオフ。タトヘバ、都會ノ住民ノ、自由ニ、公園ニ遊ブ權利ヲ有スルトトモニ、ソノ維持費ヲ分擔スベキ義務ヲオフガゴトシ。

ワガ帝國ノ臣民ニシテ、公權ヲ有シ、二年以來、市、町、村ノ

獨立選擧

住民トナリ、市、町、村ノ費用ヲ分擔シ、ソノ市、町、村ニオイテ、地租ヲヲサメ、マタハ、直接國稅、年額二圓以上ヲヲサムル、獨立ノ男子ヲ公民トイフ。公民ハ市、町、村會議員ヲ選擧シ、マタ、市、町、村ノ名譽職ニ選擧セラル、權利ヲ有ス。名譽職トハ、市、町、村會議員、無給ニテツトムル市參事會員ナドヲイヒ、コレニ選擧セラレタルモノハ、理由ナクシテハ辞スルコトヲ得ズ。コレ、前ニイヘルガゴトク、市、町、村ハ、イヅレモ自治團體ニシテ、ソノ政務ヲトルハ公民ノ義務ナルガユヱナリ。

公民ノ選擧シタル市、町、村會議員ハ、アヒ集リテ、市、町、村

條例規則

會ヲ組織ス。市、町、村會ハ、法律、命令ニ從ヒテ、市、町、村條例、規則ヲマウケ、マタ、コレヲ改正スルコト、教育、土木、衛生(エイセイ)ノゴトキ、市、町、村費ヲモッテ支辨(シベン)スベキ事業、歳入、歳出ノ豫算(ヨサン)ヲ定ムルコトナド、スベテ、市、町、村ニ關スル、一切(イッサイ)ノ事件(ジケン)ヲ議決ス。

マタ、市會ハ市長ヲ推薦(スイセン)シ、助役(ジョヤク)、名譽職(メイヨショク)參事會員ヲ選擧シ、町、村會ハ町、村長、助役ヲ選擧ス。市、町、村會ノ議決ヲ執(シッ)行(コウ)スルモノハ、市ニアリテハ、市參事會ニ、シテ、町、村ニアリテハ、町、村長ナリ。市參事會ハ市長ト助役ト名譽職參事會員トヨリ成ル。

官吏

幸福

町、村ハ、集リテ、郡ヲナシ、郡、市ハ、集リテ、府、縣ヲナス。郡、府、縣ニハ、郡、府、縣會アリ、郡、府、縣參事會アリテ、公民ノ選擧シタル郡、府、縣會議員、名譽職(メイヨショク)郡、府、縣參事會員、ソノ政務ニアヅカル。スナハチ、郡、府、縣モ、コノ點ニオイテ、イヅレモ自治團體(ダンタイ)ナリ。サレド、郡ノ郡長、府、縣ノ府、縣知事ナドハ、イヅレモ官吏ナレバ、公民、ミヅカラ議決シ、執行(シッコウ)シ得ル自治團體ハ、タダ、市、町、村アルノミナリ。

要スルニ、市、町、村自治ノ制度(セイド)ハ、ソノ地方ニオケル共同ノ利益ヲ發達セシメ、人民ノ幸福ヲ增進(ゾウシン)シ、サラニ、ソノ團體(ダンタイ)ノ權利、義務ヲ保護センガタメニマウケラレタル

忠良

制度ナルガユヱニ、ワレラハ忠良ナル帝國臣民タランコトヲツトムルトトモニ、マタ、善良ナル自治團體ノ公民トシテ、大イニツクストコロナカルベカラズ。

をはり。

72431

国立国語研究所
1000605426

明治三十七年二月廿五日 印刷
明治三十七年二月廿八日 發行
明治三十九年七月十日 翻刻印刷
明治三十九年七月廿八日 翻刻發行

著作權所有

明治三十九年七月十九日
文部省檢査濟

著作兼發行者 文部省
翻刻發行者 大橋太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 愛敬利世 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百〇八番地
發行所 博文館 東京市日本橋區本町三丁目八番地
發賣所 東京市日本橋區新右衞門町十六番地 株式會社國定教科書共同販賣所

高等小學讀本 四

定價金八錢

. O
24